

## 金光教の裁ち物

(1)	<small>ふくめん</small> 覆面	1
(2)	<small>しきがみ</small> 敷紙	2
(3)	<small>ほうへい</small> 奉幣	3
(4)	<small>たまぐし</small> 玉串	7
(5)	<small>みけぶくろ</small> 御饌袋	9
(6)	<small>やたれ</small> <small>ふたたれ</small> 八垂・二垂	11
(7)	つのかざり	12
(8)	<small>みつわ</small> 三輪かざり	14
(9)	<small>か</small> <small>お</small> 掛け緒	16
(10)	<small>ごしんまい</small> 御神米	17
(11)	<small>けんび</small> ご献備のお包み	20

この文書・図の全部または一部について、権利者の許可なく複製、転用等する事を禁止します。

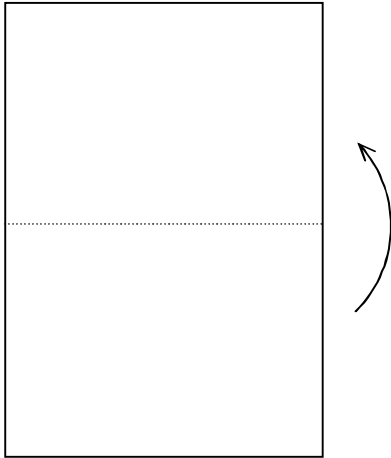
尚、この内容を団体、組織、講習会等で使用したい場合は、事前に

[kamiyu1959@ybb.ne.jp](mailto:kamiyu1959@ybb.ne.jp)

金光教三石教会 川上幸生 までご連絡下さい

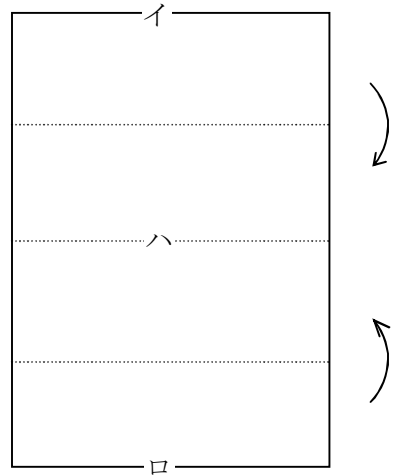
一 覆面

1



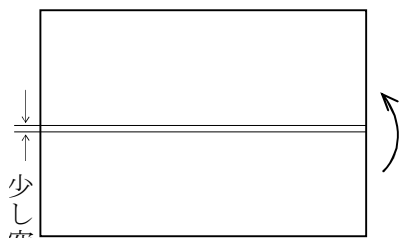
半紙の裏が内になるように半分に折る

2



一度開き、イ、ロを折れ線ハに合わせるように内側に折りこむ  
注) ハに合わせる時、1mm程空けるとよい

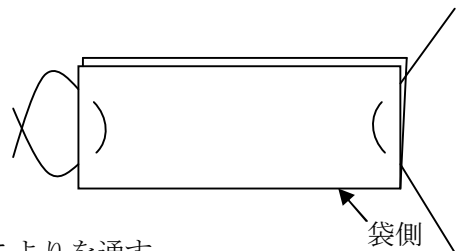
3



少し空ける

もう一度、半分に折る

4



こよりを通す

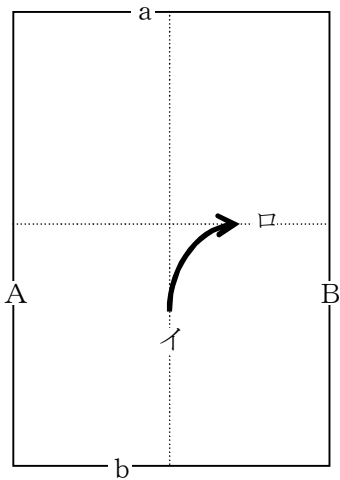
注) こよりの穴を空ける時、端に近づすぎると紙は裂けるので注意する

穴の間隔を広くすると耳に掛けるこよりは短くなる

こよりの片方は結び、他方は使用する者が自分に合わせて結ぶ

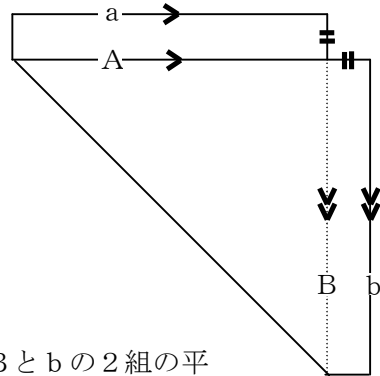
二 敷紙

1



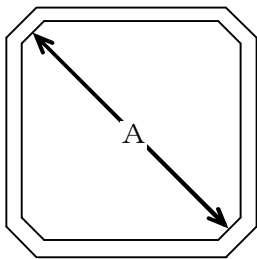
イとロを重ねるように折る。その時、Aとa、Bとbは平行になる

2

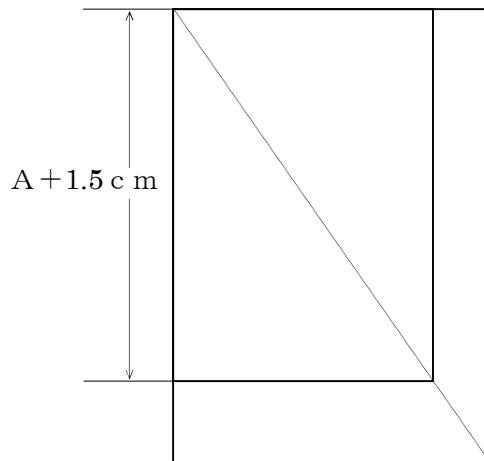


Aとa、Bとbの2組の平行線の間隔は等しくなる

○各種の三方に合った敷紙の大きさ



三方の内りの対角線を計る (Aの長さ)

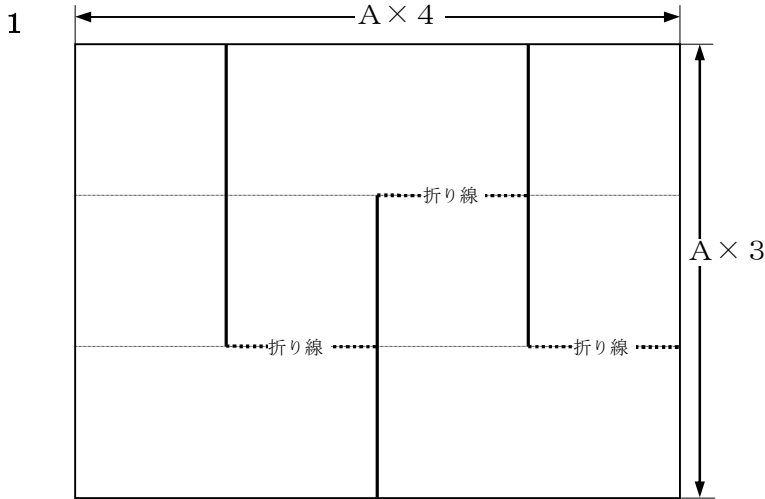


上図のように長方形を切り取ると三方に合った敷紙ができる。

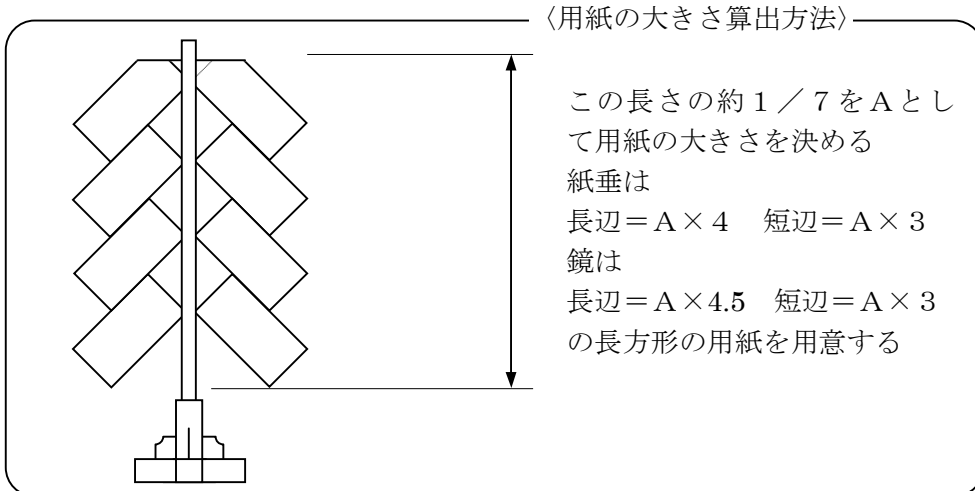
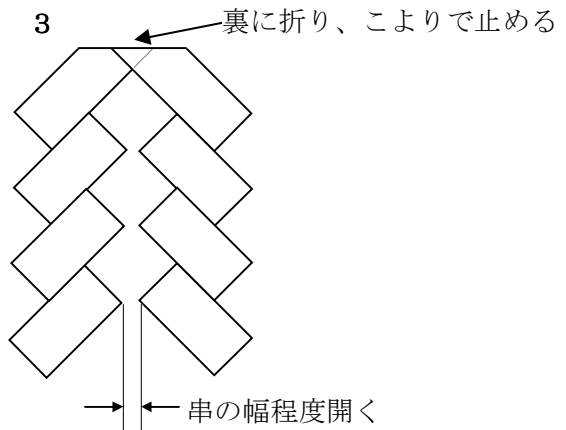
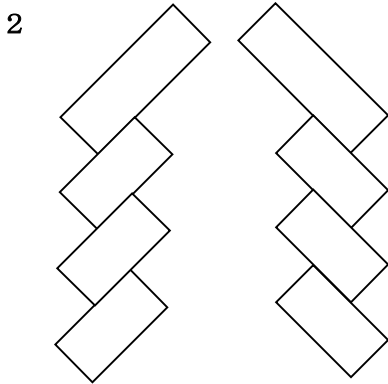
但し、尺三方以上は美濃半紙を用いる

三方の大きさ	敷紙のサイズの目安	
4寸	18×13 cm	半紙 1/4
5寸	21×16 cm	
6寸	24×18 cm	半紙半分
7寸	27×20 cm	
8寸	30×22 cm	
9寸	33×24 cm	半紙全紙
尺	36×26 cm	美濃紙

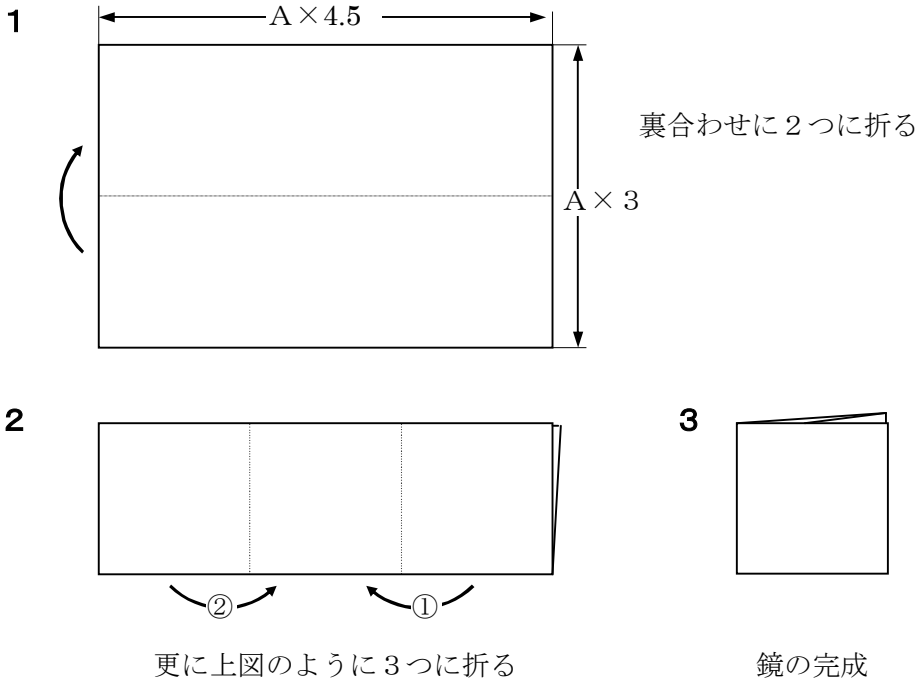
三 奉幣  
(紙垂)



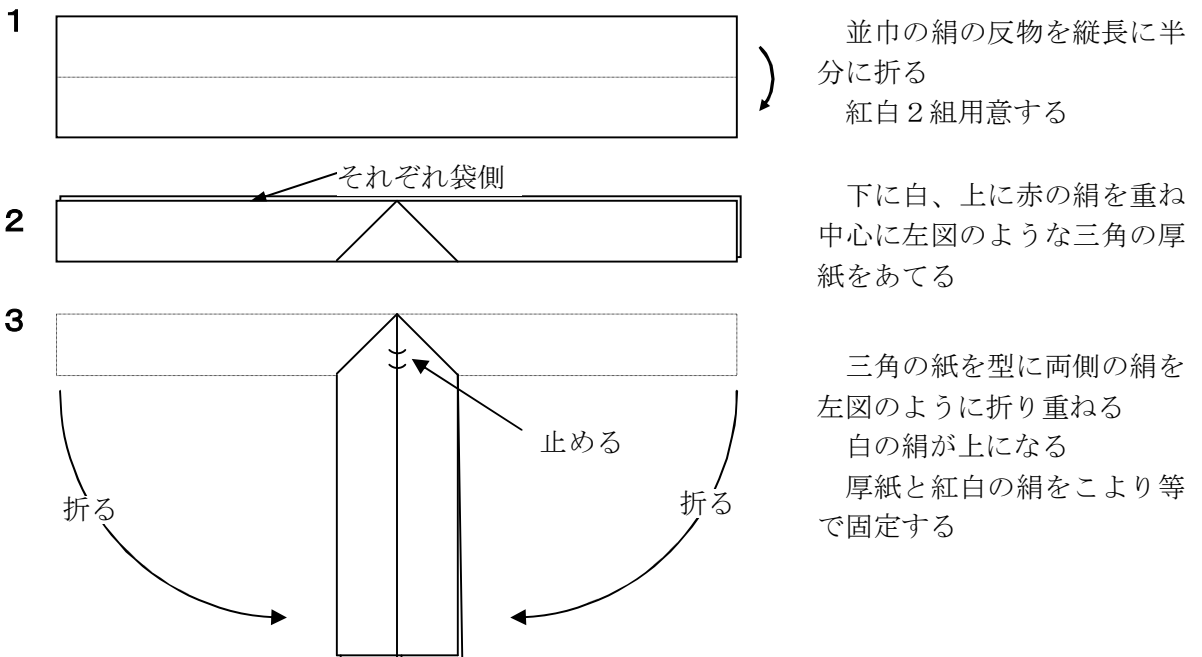
用紙2枚を裏あわせ、または左図の下が袋になるように大きな紙を2つ折りにする。  
用紙の長辺を4等分、短辺の3等分して、左図の実線で切る。  
これを2組作る。



(鏡)

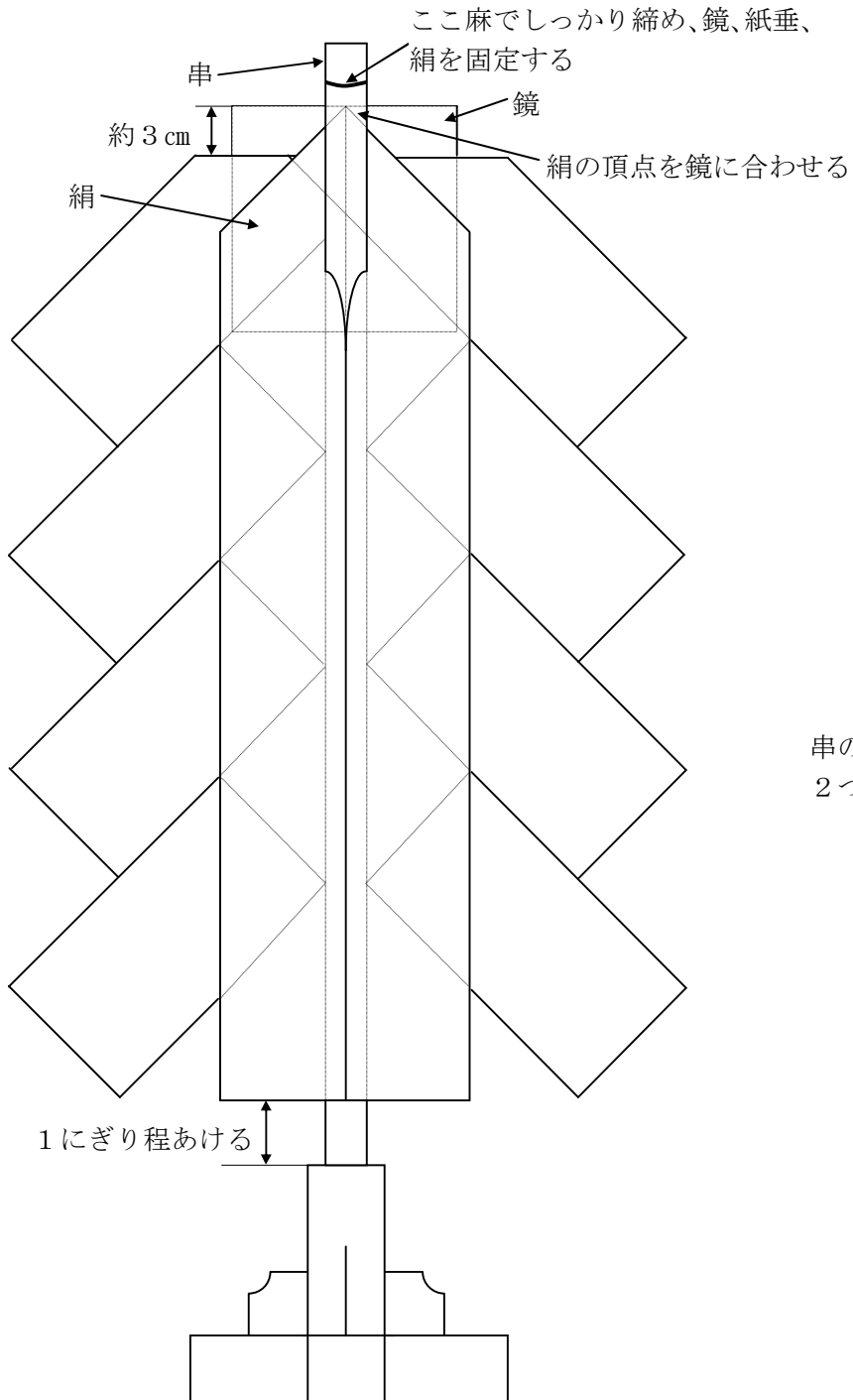


(紅白の絹)



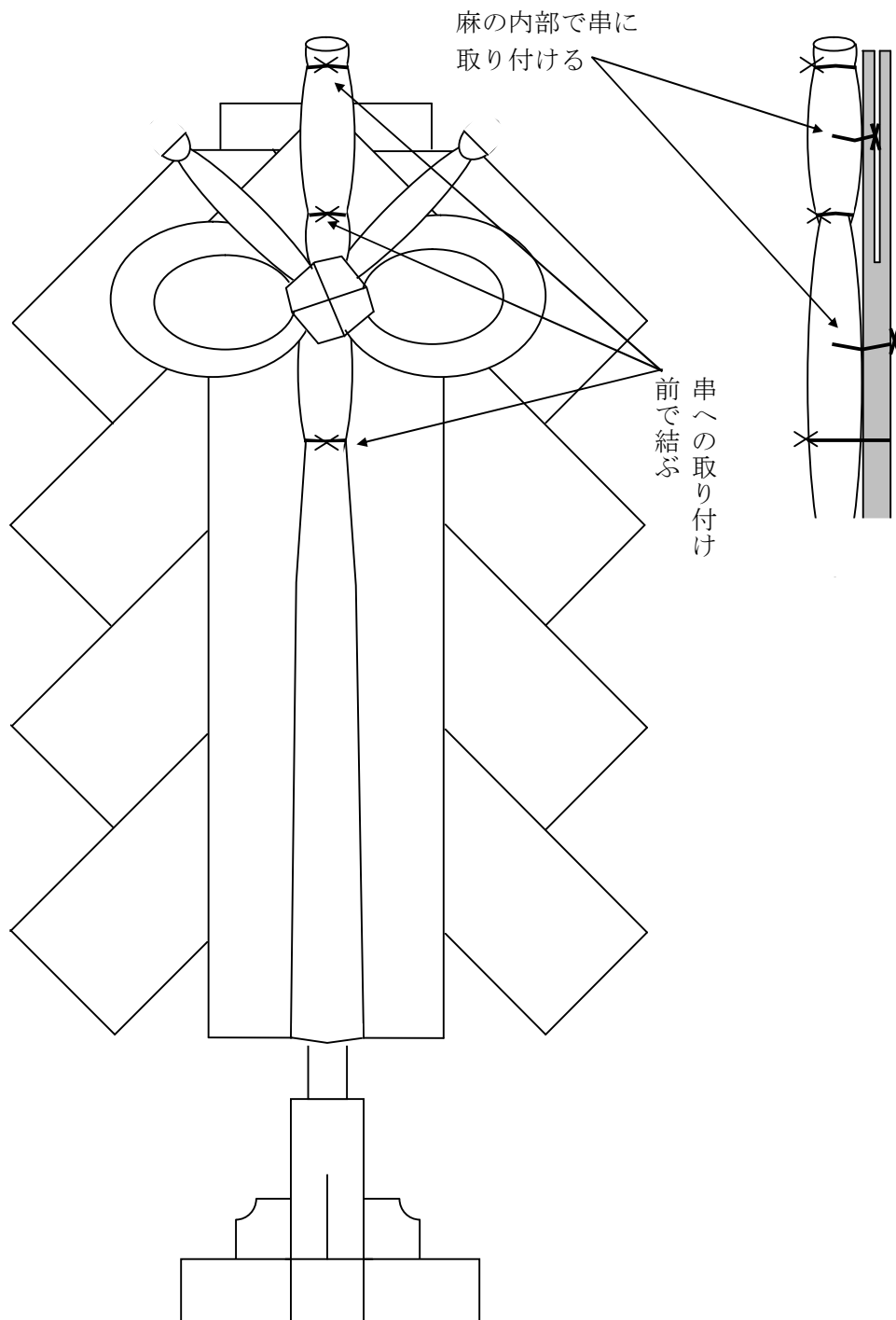
(組み立て)

- 1 下から鏡、紙垂、絹の順で歪まないように重ね、先を割った串に挿す



串の先 (側面)  
2つ割りの場合もある

2 つのかざりの取り付け (つかざりの結び方は後述)



### 四 玉串

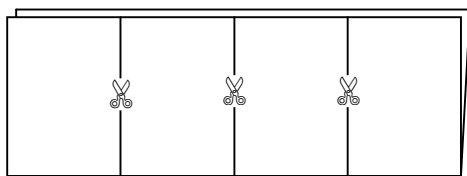
#### (A) 片紙垂の玉串 (一般的な紙垂)

1

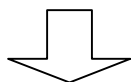


半紙の裏が内になるように半分に折る

2

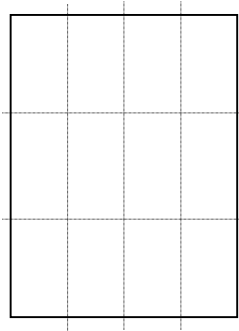


左図のように4等分に切る  
1枚の半紙から4枚の紙垂ができる



1枚を拡大

3



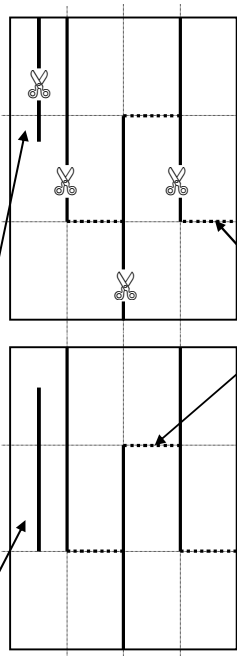
複数枚作る内、1枚を長辺を3等分に、短辺を4等分に折る

この紙を型紙にして右図のように切り込みを入れる

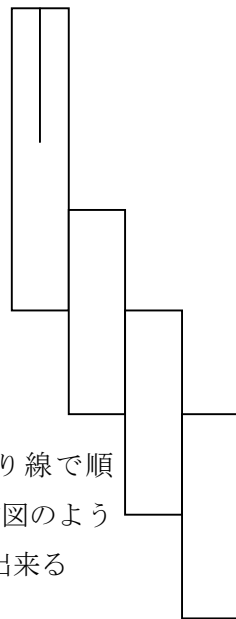
右上は櫛に結び止めをする場合

右下は櫛の葉に掛ける場合の切り込み

4



5

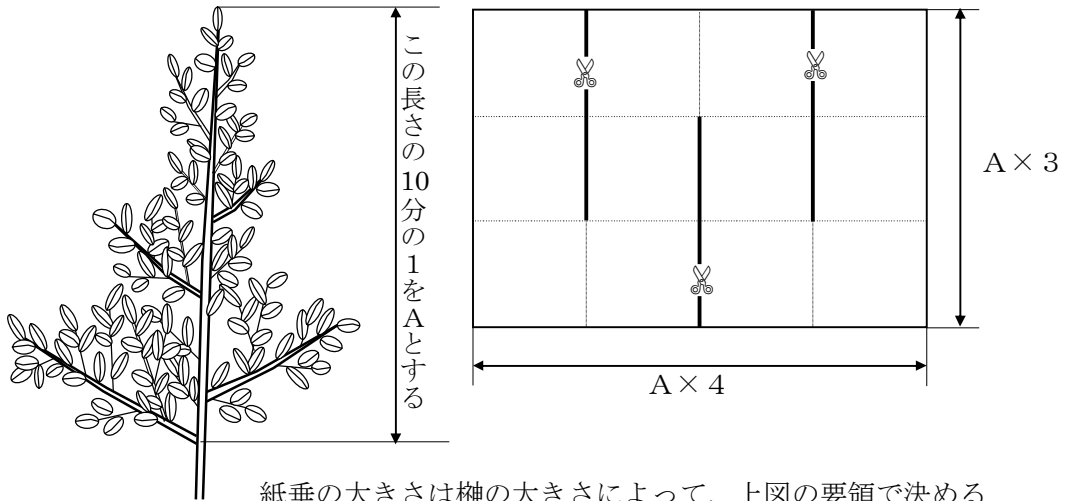


左図の折り線で順の折ると、右図のようにな紙垂が出来る

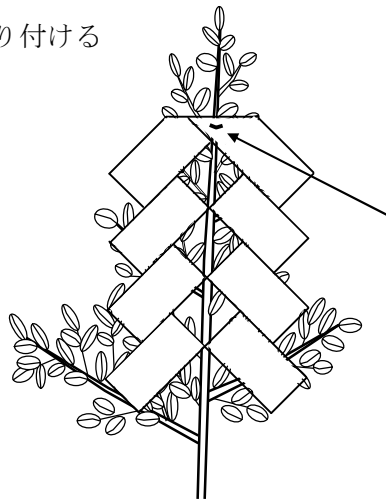


## (B) 両紙垂の玉串（祭主用）

### 1 紙垂の大きさを決める



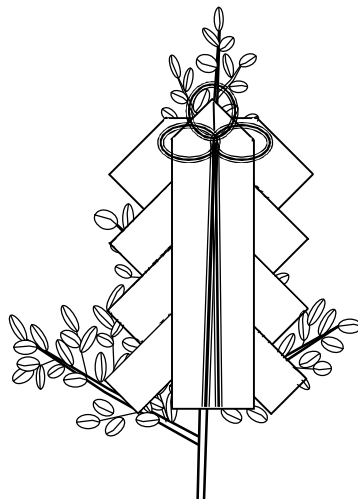
### 2 紙垂を榊への取り付け



奉幣の紙垂の要領で2組用意し、榊の中央になるよう、こよりで止める  
このままで用いる場合もあるが、さらに紅白の絹と麻を加えることもある

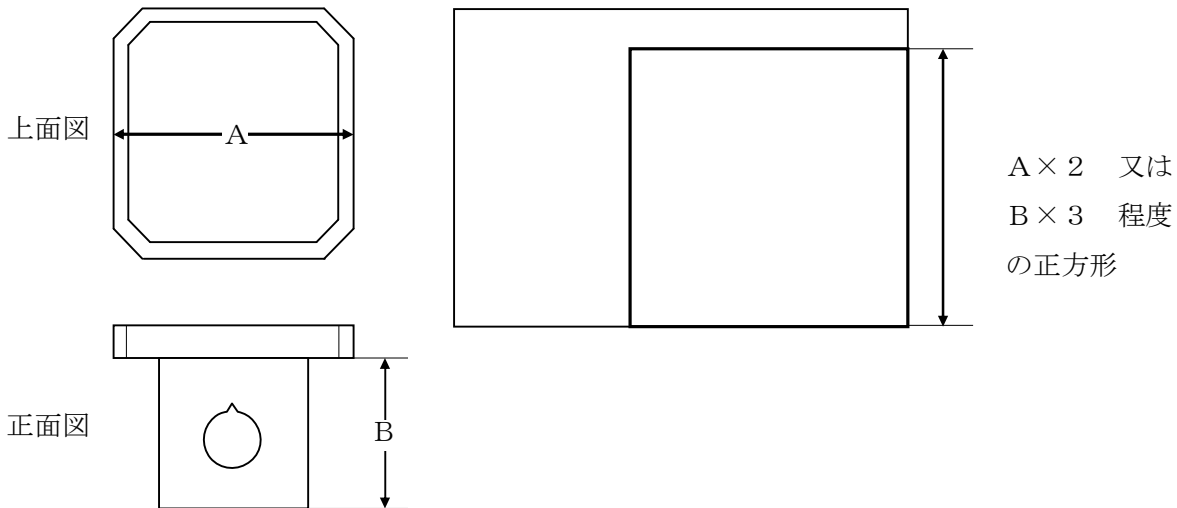
### 3 絹、麻の榊への取り付け

奉幣の絹の要領で紅白の絹を用意し、麻は三つ輪かざりに結ぶ  
紙垂、絹、麻の順に重ね、固定したものを榊にこよりで止める  
(三つ輪かざりは後述する)

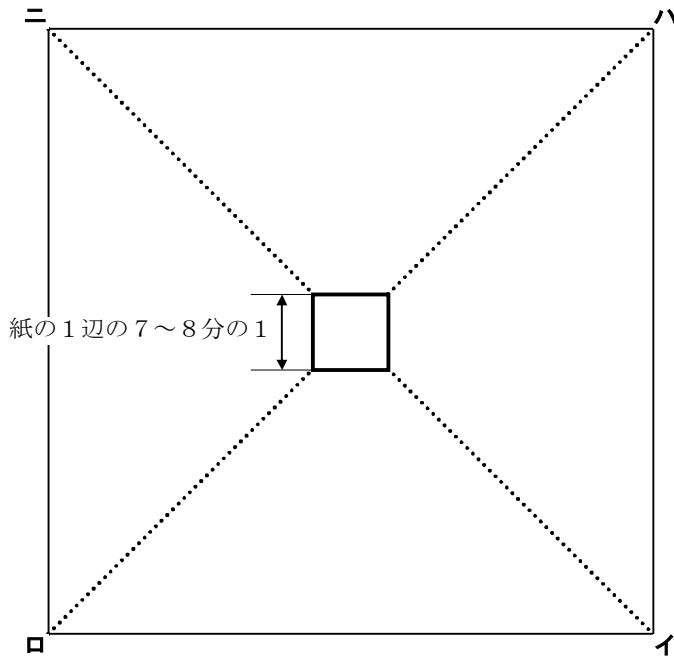


## 五 御饌袋

### 1 用紙の大きさを決める



### 2 型どり



正方形の紙の中央に1/7から1/8程度の大きさの小さな正方形を作る

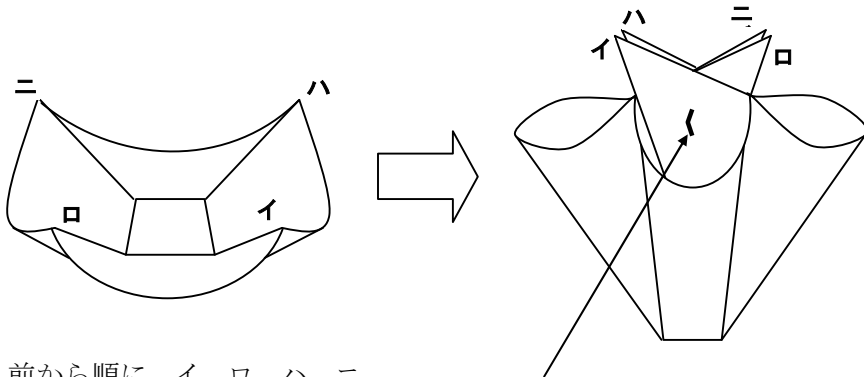
紙の中心を求め、そこからそれぞれ角までの長さの7~8分の1の点を結ぶと小さい正方形が出来る

—— 線か谷折り

..... 線は山折りにする

中央の正方形の中まで折れ目をつけると、完成した時安定が悪いので注意する

2 組み立て（下図のように袋状に折り曲げる

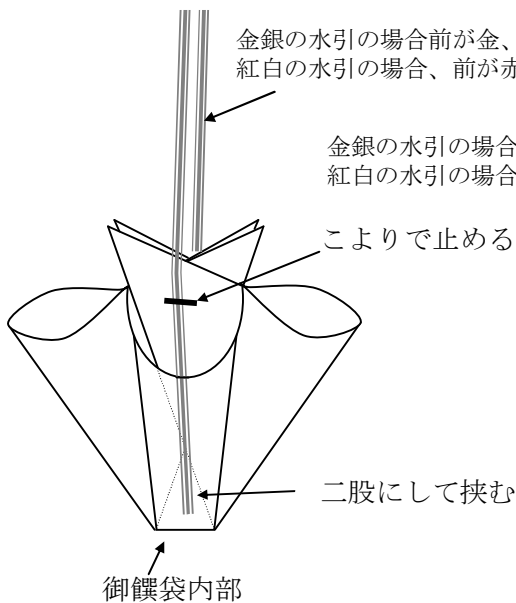


前から順に、イ、ロ、ハ、ニの部分を交互に重ねる

ひらかないように、縦に2つ穴をあけ、こよりで止める

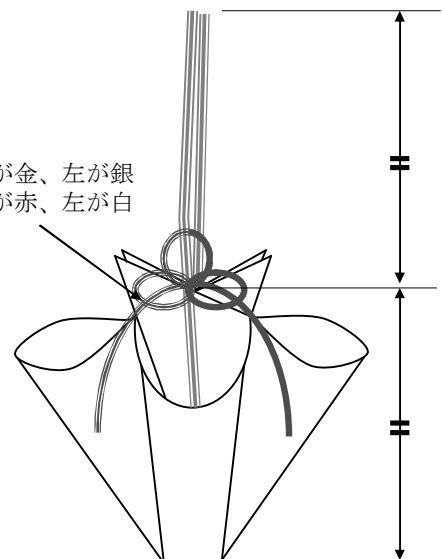
重ね目をクリップで仮に止めておくと作業しやすい

3 水引のつのかざりをつける



40号水引7本付を10本程使用する  
教会によって本数を加減するとよい

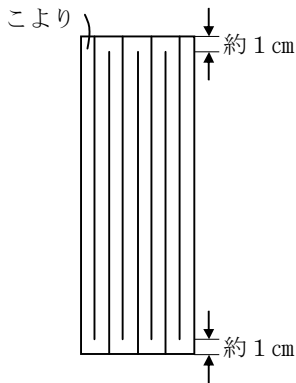
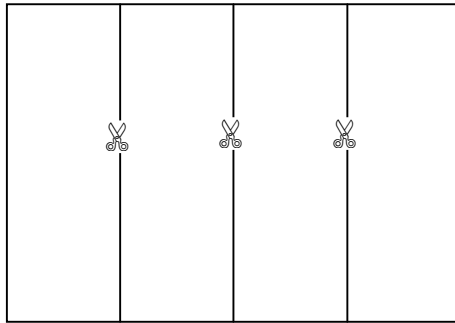
4 三つ輪かざりをつける



三つ輪かざりを取り付ける時、傾かないように注意すること

## 六 八垂(やたれ) 二垂(ふたたれ)

### 1 八垂



2～4枚の半紙を重ね、左図のように4つに切る

切った半紙を重ね、端をこよりで止める

上下を約1cm残して、左図の実線で7箇所切る

このとき、最初は一方向なかり切り、裁ち台(カッティングマット)ごと回転させて、もう一方を切るとよい

また、要所々々をゼムクリップ等で止めておくのもよい

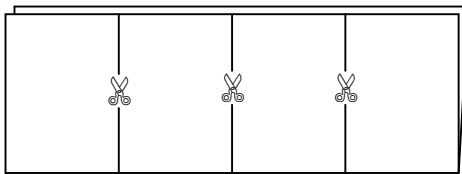
こよりの所を持ち上げて八垂の完成

葬儀等の時、1本1本ばらしながら、1対の大櫛に均等に掛ける

大祭等では、神前の1対の大櫛に5色の布を掛ける場合がある

その場合は、正中側から、紫(黒)、白、紅、黄、青(緑)の順

### 2 二垂

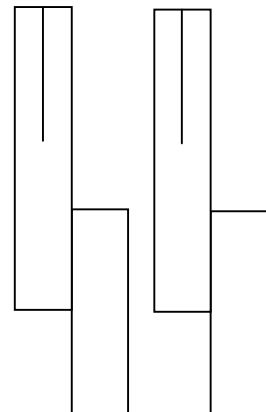
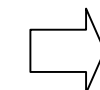
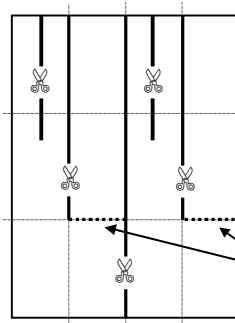
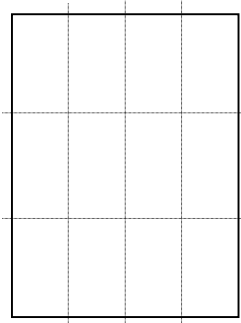
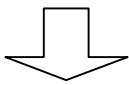


片紙垂の要領で、図に従って作る

片紙垂1枚の用紙から、1対の二垂が出来る

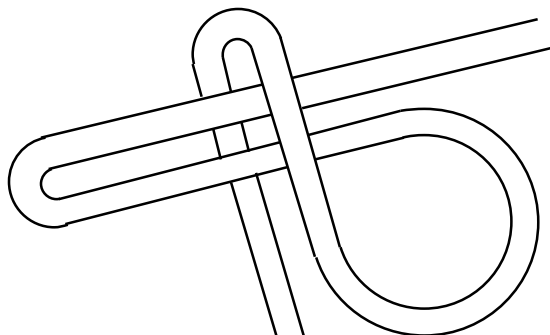
葬儀の際、柩や新霊床の1対の櫛にこれを付

ける



七 つかざり

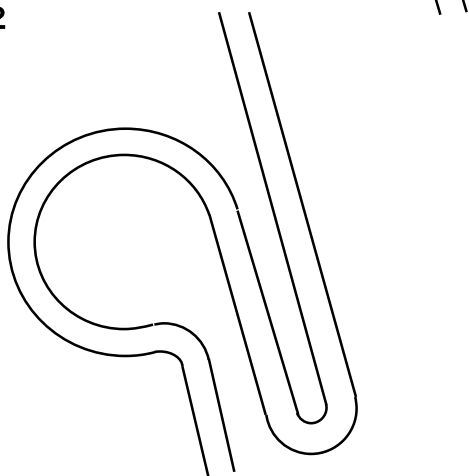
1



麻を標準で2 kg用意し、  
500 g づつ 4 つの束に分ける  
教会によって加減する

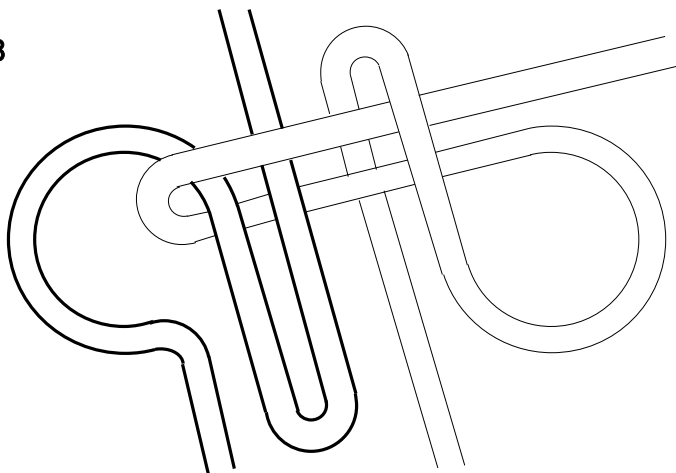
1 束で左図のように、右の  
輪を作る

2



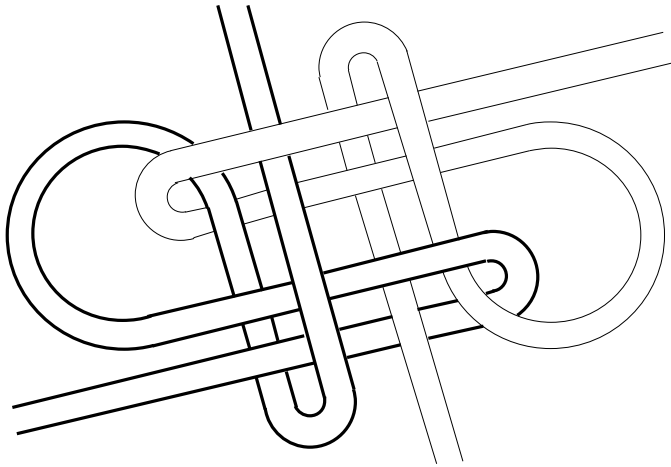
別の1束で、左図のように、  
左の輪を作る

3



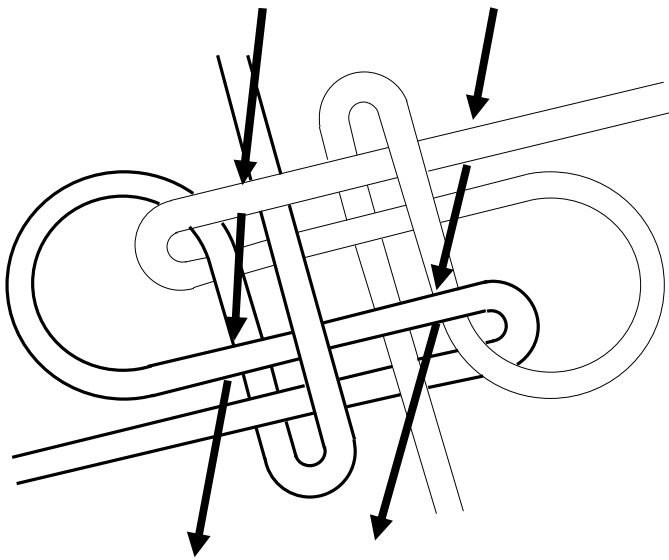
左図のように、左右の輪を  
組み合わせる

4



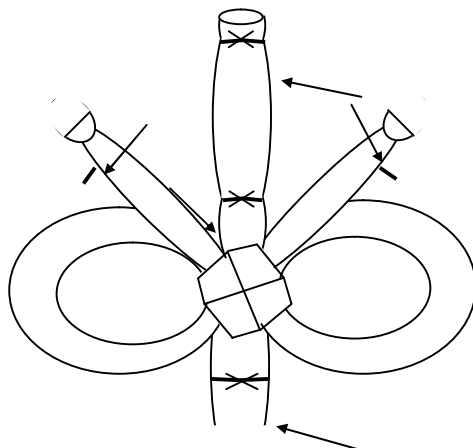
ひきつづき、左右の輪を組み  
み合わせ、少しゆるめに結ぶ

5



左図の矢印のように、残っ  
た2束をそれぞれ、先に作っ  
た輪に通す  
輪を締めて、形よく結ぶ

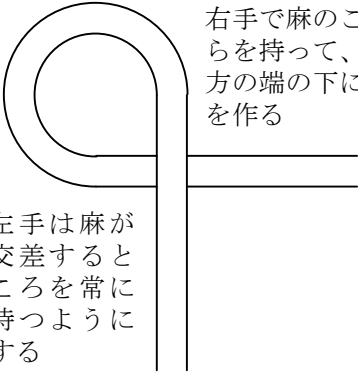
完成



解けないように要所々々を  
1本の麻で縛る

### 八 三つ輪かざり

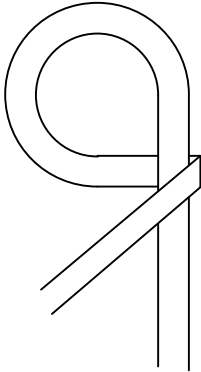
1



右手で麻のこちらを持って、一方の端の下に輪を作る

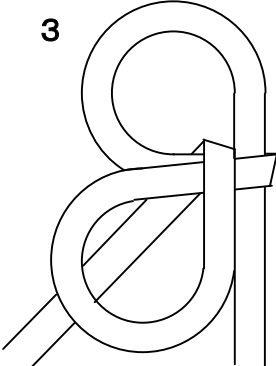
左手は麻が交差するところを常に持つようにする

2



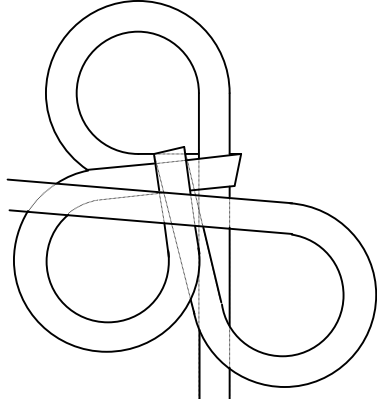
折り返す

3

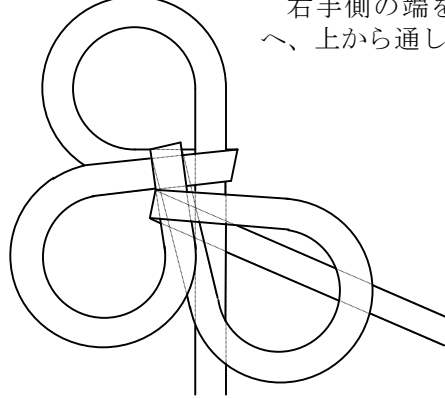


次の輪を、先の輪の上、右側に作る  
その際、右手で持った端を上重ねるように輪を作る  
右手側の端を最初の作った輪へ、上から通して折り返す

4



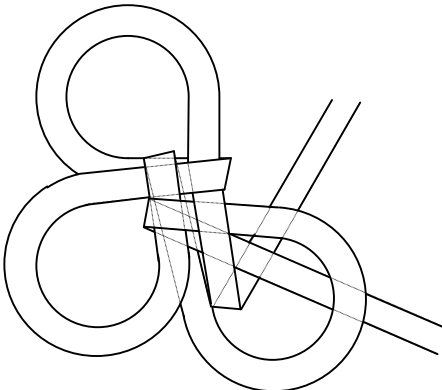
5



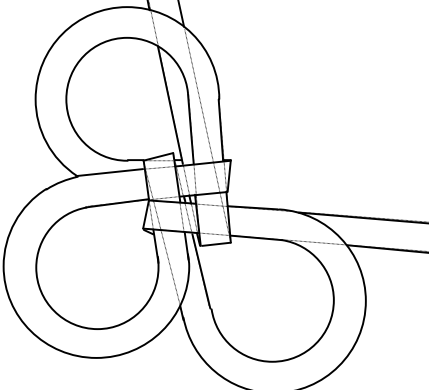
3つ目の輪を、2つ目輪の上、右側に作る  
2つ目の輪と同じ要領で、右手で持った端を上に重ねるように輪を作る

右手側の端を2つ目の輪へ、上から通して折り返す

6



7

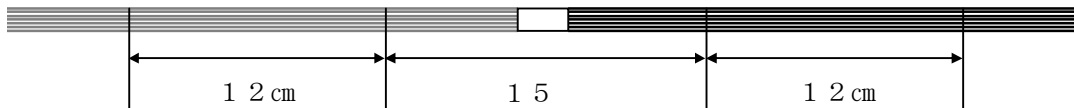


もう一方の端を、3つ目の輪へ、上から通して折り返す

最後に、三つ輪かざりを裏返し、中心の結びが巴組になるよう、最後に輪を通した端を組み込む

### 八' 三つ輪かざり（水引の中央から結ぶ場合）

1 出来上がりの見当をつける（下の数字は、尺三方用の御饌袋に使用する三つ輪）



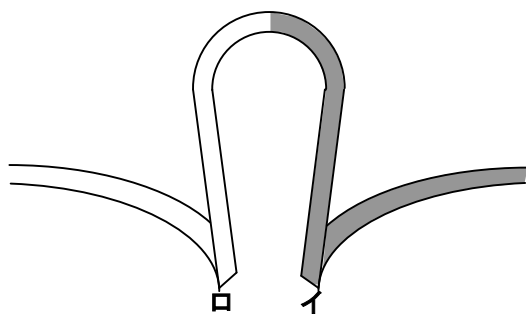
金銀の水引の場合、金が右、銀が左になるように輪を作る

水引を2本使用する場合は、づれないよう結び目を仮止めしておく

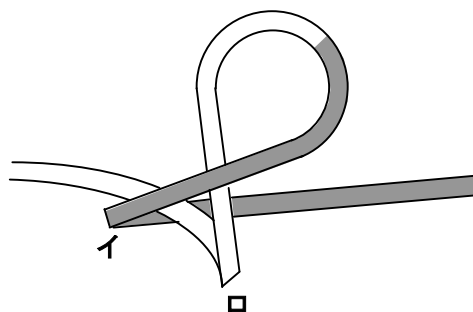
上の寸法で折りを付けておく（下は横からの図）



2

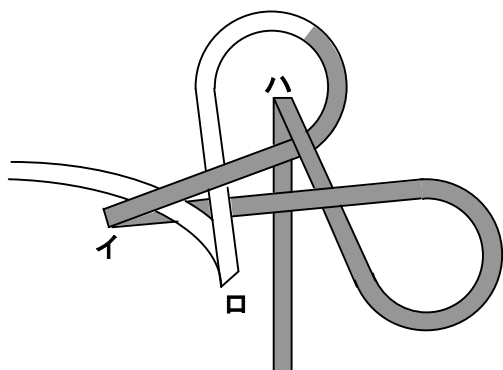


3



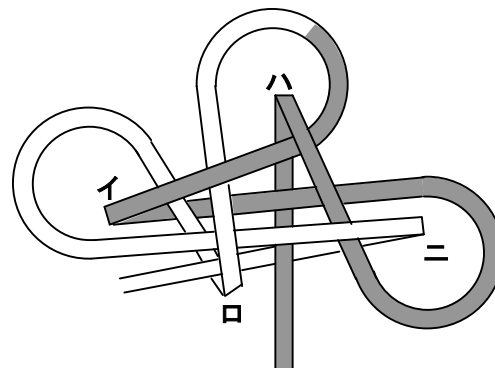
ロの折り目を、イの折り目の中にはさみ込む  
中央の輪を作る

4



ハの折り目を、中央の輪に通し、右の輪を作る

5

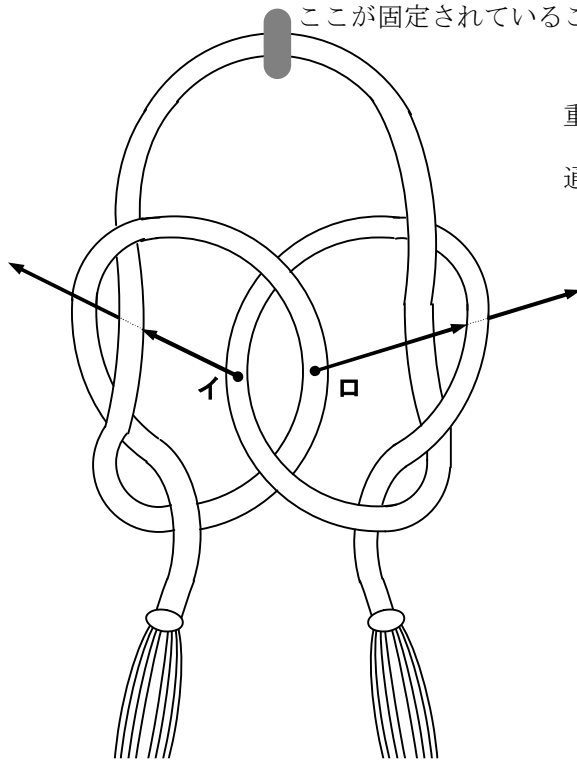


ニの折り目を、右の輪に通し、上図の  
ように、中央の水引を組み合わせる  
それぞれの輪と端を引き、中央の組込  
みを締め、形を整える



九 掛け緒 (御簾の房、桧扇の房、祭詞袋の飾り等の結び方)

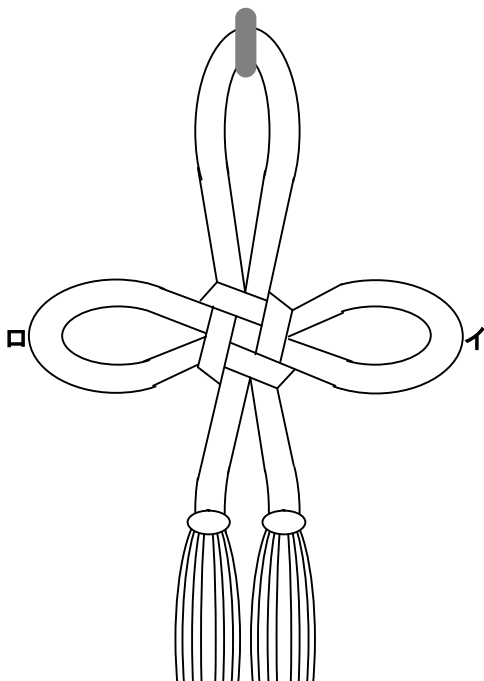
1



ここが固定されていることが多い

左右の紐を通すように、それぞれを一重に結ぶ (左図)  
イ、ロの輪の部分に矢印で示した所を通す

2

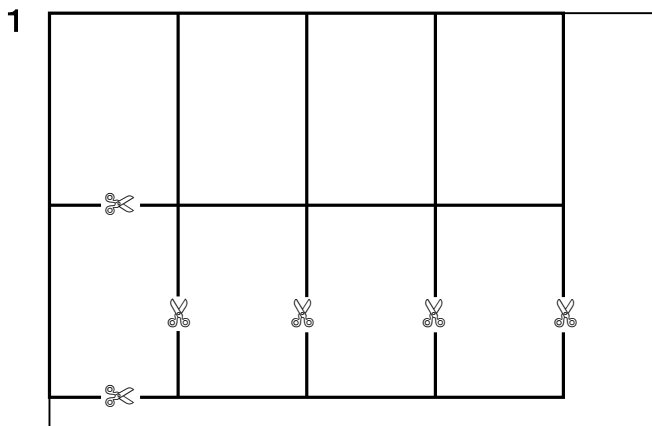


イ、ロの輪の部分は左図のようになり、中央を締めて形を整える

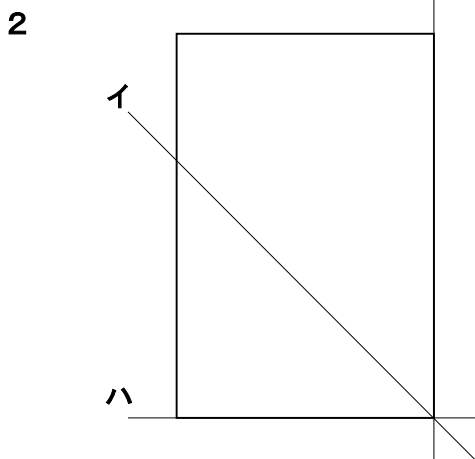
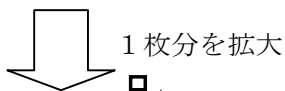
それぞれの輪の大きさは、物によって加減する

# 十 御神米

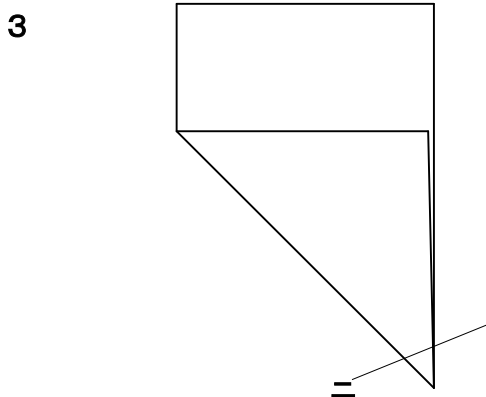
おけんざき  
(御剣先) 美濃半紙 400×275



御剣先に相応しい紙を用意する  
本部広前の御剣先用の紙は純粋な和紙で、そのサイズは 85 mm×127 mm  
美濃半紙 (400 mm×275 mm) からは、左図のように 8 枚の用紙が取れる

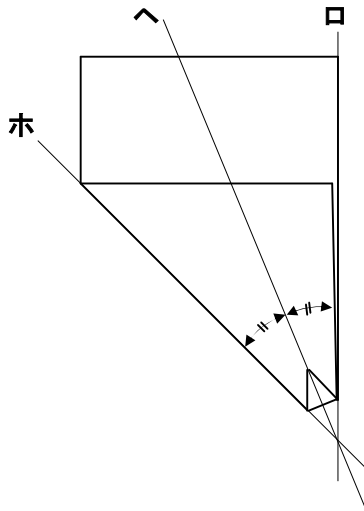


イの線を折り線として、ハの線をロの線に合わせるように折る  
そのときハの線はロの線に丁度合わせず、1 mm程度ひくようにする  
(さらに半分に折った時、ハの線がのぞかないため)



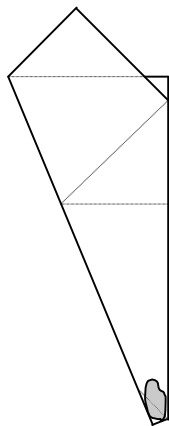
先端をニの線で折る  
その時できる三角形は「二等辺三角形」にする  
またその底辺の長さは、米粒の幅の 2 倍程度にする

4



への線を折り線として、ホの線をロの線に合わせるように折る

5



形の整ったお洗米を12粒程度入れる  
専用のスプーンか匙を用意するとよい  
また、最初の1粒は図のように、縦に入る

### よね (お米の調整)

お米は<sup>せんまい</sup>お洗米を用いる

お洗米の調整は、冬の寒期間に行うのが望ましい

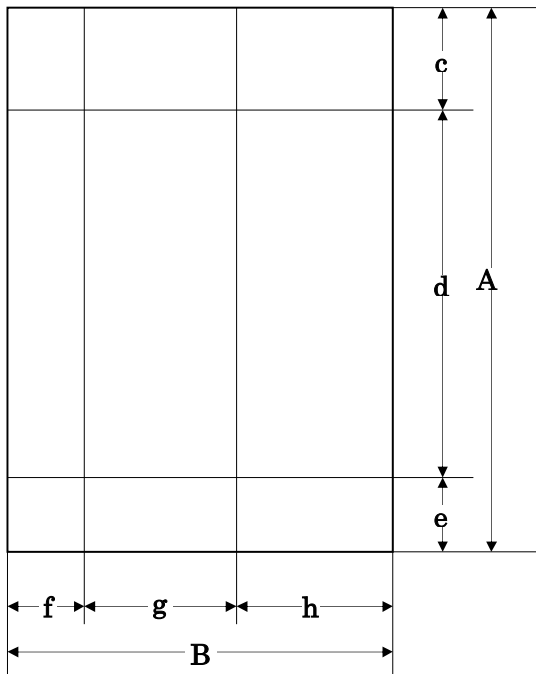
白米を洗い、良く水を切る

陰干しし、乾いたら霧吹き等で御神酒をふくか、改めて御神酒に潜らす

また、陰干しにする

寒期間中に、上の要領で調整したお洗米は割れにくい

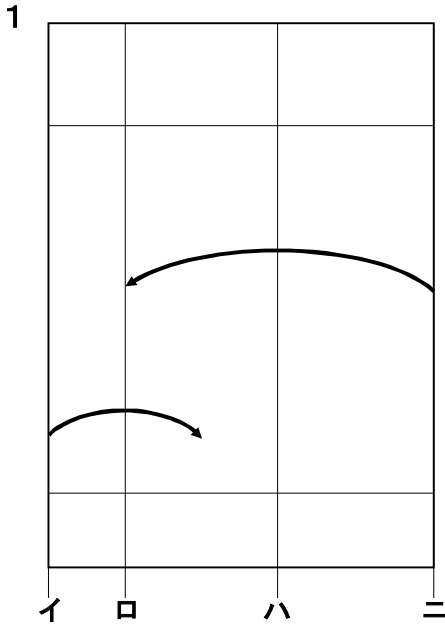
うわづつ  
上包み



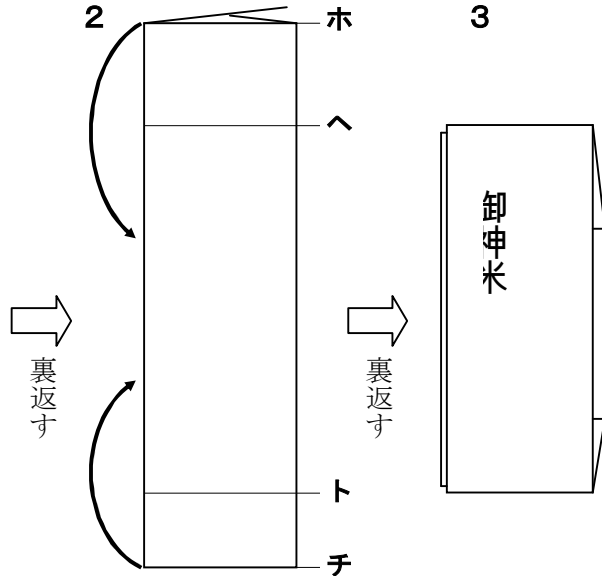
参考として本部広前の上包みのサイズを示す

<b>A</b>	240 mm	<b>e</b>	33 mm
<b>B</b>	170 mm	<b>f</b>	34 mm
<b>c</b>	45 mm	<b>g</b>	67 mm
<b>d</b>	162 mm	<b>h</b>	68 mm

ほぼ半紙の半分の大きさ



裏を上にして、ロの線を折れ線にして、イの線を内に折る  
ニの線をロの線に合わせるように内に折る

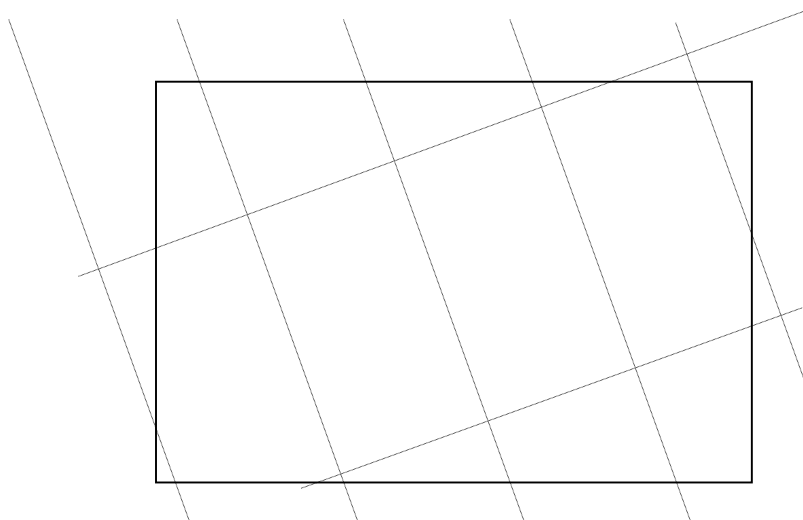


裏返して、への線を折れ線にして、ホの線を内に折る

トの線を折れ線にして、チの線に合わせるように内に折る

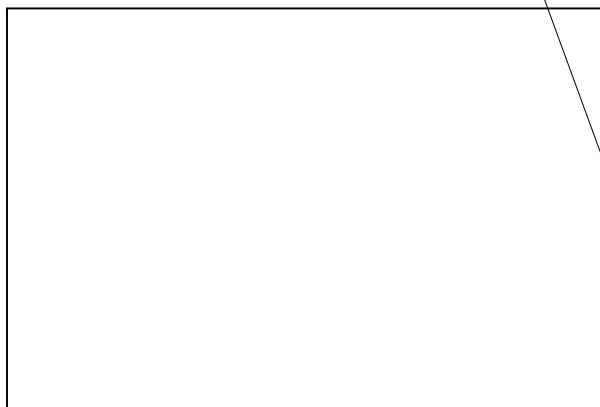
ふたたび裏返して完成

### 十一 御献備のお包み



奉書の半分を用意する  
完成後の折れ線は左図の点線のようなになる  
以下に、この折れ線をつける為の手順を示す

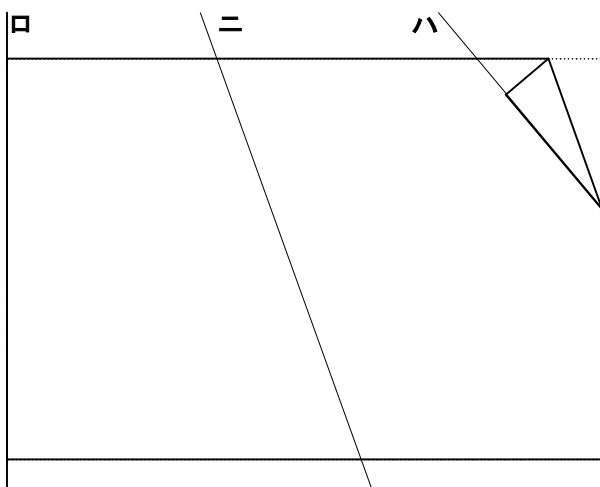
1



完成後をイメージして、裏へ折り返しの三角（のりづけする部分）を最初に作る  
イの線を折り線として内に折る

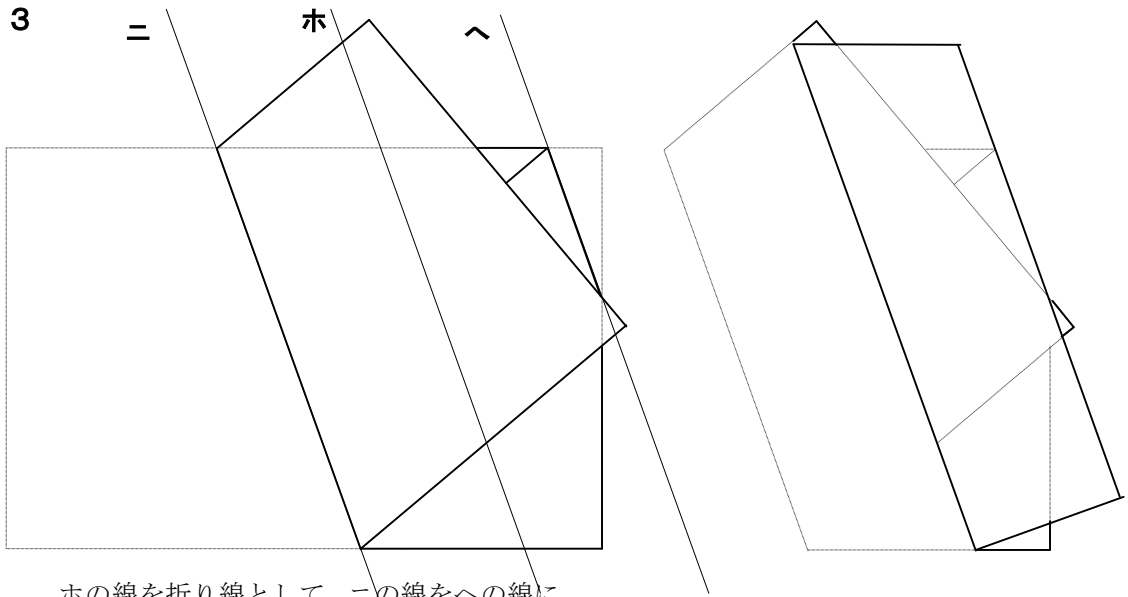
イ

2



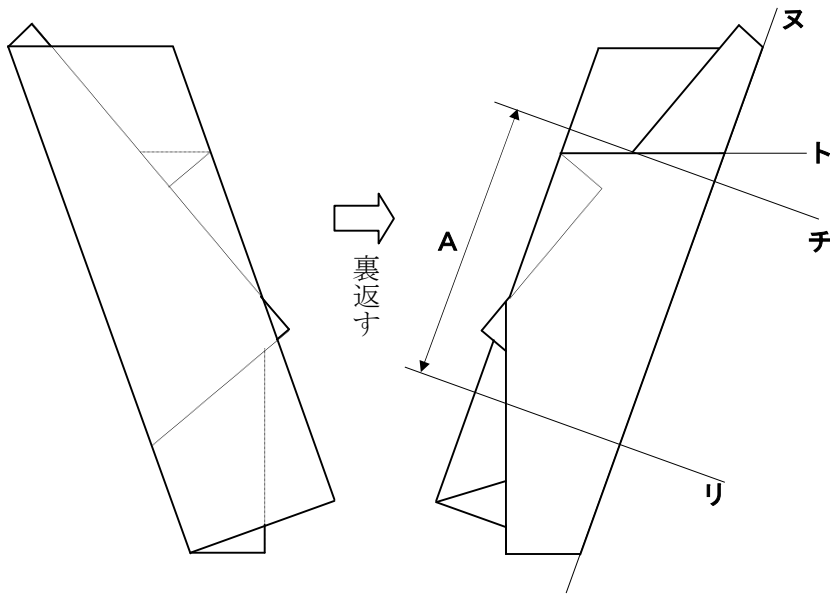
ニの線を折り線として、ロの線をハの線に合わせるように、内に折る

3



ホの線を折り線として、ニの線をへの線に合わせるように、内に折る

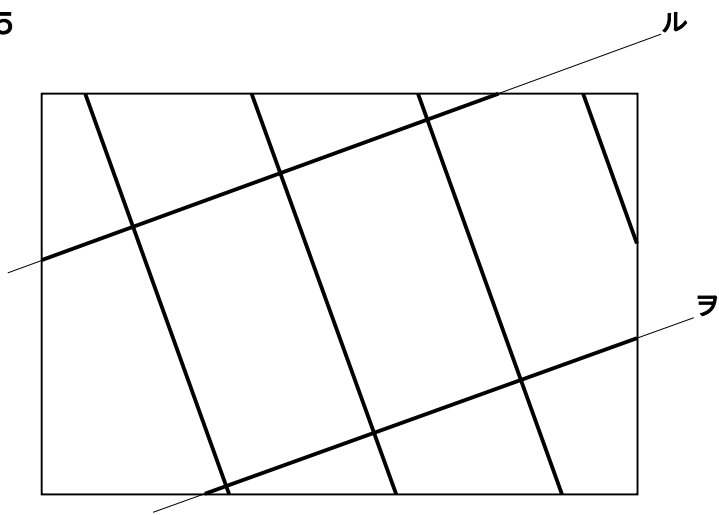
4



用紙のトの線の中央で交わるように、チの線を折り線として、上端を内に折る（又の線を揃える）

お札の長さを考慮してAの長さを決め、リの線を折り線として、下端を内に折る（又の線を揃える）

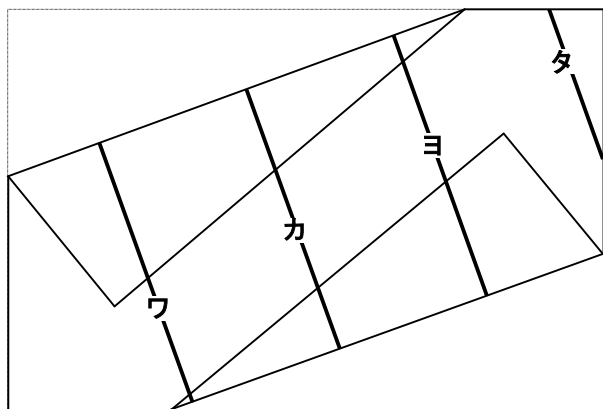
5



一度用紙を広げると、左図の太線のように折り目が出来ている

ルの線と、ヲの線を折り線として、裏を内にして、それぞれ折る

6



ワの線を折り線にして、左の端を内におる

同じように、カの線、ヨの線、タの線の順に折り線として、左端を順に内の折る

完成

